

豊中ロータリークラブ教育フォーラム

「生と死を考える 一人生をいかに生きるのが良いのか」

畑田耕一、畑田耕司、関口焔、服部敬弘、細川隆弘、関谷洋子、豊島了雄、米田真 横山順一
久保田拡鑑

本文は、平成 26 年 1 月 25 日（土）13：30～17：00 に豊中市ホテルアイボリー「櫃の間」で豊中ロータリークラブ青少年奉仕活動の一つとして行った表記フォーラムの録音記録をもとに、司会者の畑田耕一が起草した原稿を上記の著者が校閲・校正して作成されたものです。このフォーラムは参加者の年齢が 15～86 歳、国籍が日本、中国、イラン、オランダ、ドイツ、ブラジルの 6 か国、参加者の専門分野も多岐にわたり、生と死の核心に触れる討論を行うことが出来たと思っています。参加者総数はロータリアン 15 名を含めて 42 名でした。フォーラムにて貴重なご意見をいただいた参会者の皆様方に感謝するとともに、全参会者の皆様方のお名前を文末に記して、あらためて厚く御礼を申し上げます。

はじめに一人の誕生から死まで

人の誕生は産みの苦しみを超えて生産の安堵感に続く喜びに終わります。ここで喜ぶのは子供を産んだ母であり、その周辺の人々であって、生んでもらった本人が安堵し喜んだかどうかは、定かでない場合が多いのです。子を産んだ母は、出産直後はまずほっとした安堵感を感じ、しばらく経ってから産みの喜びに感動するといいます。赤ちゃんをへその緒が付いたまま見せられるという時点で母が一番喜ぶということです。自分から生まれたのだという感動です。産んで貰い育てられた子供はやがて死を意識し自覚して生きるようになり、ついには死を迎えます。もうあなたは余命 2 年ですよというようなことを医者から告げられた時、その余命をどのように過ごすかを考えめぐね、自分の運命を悲しむことはあっても、誰かが亡くなった時に大変悲しむのは、周りの人であって、死んだ本人ではありません。

人の死の瞬間に立ち会うのは、多くの場合医者であり、医者は、医学的に死を宣言すれば、ことは終わりです。最近臓器移植という新しい技術の進歩に伴い、心臓死の他に脳死の判断が必要になる場合が生じてきました。臓器移植法という法律で脳死ということを経済社会としても認めて、脳死をその人の人格停止と判断することになっています。ただ、脳死を的確に判断することはかなり困難で、医者を悩ませることが多いのです。脳死と心臓死と 2 つの死があって、そのダブルスタンダードの延長線上に尊厳死や平穏死という概念が社会的に認識されるようになってきているというのが、今の状況です。

人は何故自己の命を守るために命を持つ魚、鳥、牛、豚、野菜などを食べても良いのか

人の命は老若を問わず、今日とも明日とも知れない果敢ないものです。死を恐れない人はいないが、死を自覚するのは死に対する恐怖感を持つことではなく、我々の命は与えられた命であることを自覚することです。人は生まれる時も死ぬ時も自分で決めることはできません。人の命は人よりも偉大なものに与えられた命なのです。それ故に、多くの人は、この与えられた命をどう生きるかを考えます。その生き方の根本は、人間が他の人々や動植物を含む自然環境に対して、どのような態度を取るべきかを適切に判断しつつ生きる能力、すなわち道徳的能力を身に付けることでもあります。人はここで大きな壁にぶつかります。人は食事をしないと生きていけません。米、野菜、魚、肉などを食べて生きています。しかし、米、大根、人参、鯛、秋刀魚、牛、豚は、人間に食べられるためにこの世に生まれてきたわけではありません。人間のために生まれてきたのではないのです。彼らには彼らの生活がある筈です。人は何故自分たちが生きるために彼らの命を奪ってもよいのでしょうか。この問いに対して、

人は、「この地球上で最も能力の高い動物であって、地球上の自然界を平和に保てるのは人間だけである。したがって、その人間が生きるために多少の他の動物や植物が犠牲になるのはやむを得ないことである」という、人間の道徳の身勝手さとその能力の限界を示すような答えしか用意できません。食事の前の「いただきます」という言葉は、あなたの命をいただきます、という意味ではありますが、他の動植物の命をいただいて、それを生活の糧、人生の糧として生かさせていただきますというだけではなく、この地球の平和を守るために、あなた達に分まで頑張りますという、使命感に燃えた一種の贖いの言葉と解釈することも出来ます。ここで述べたことは、科学的には、何物も他の助けなしには生きられないことを示しているともいえるし、宗教的には、人は偉大なるものによって生かされていることを、よく考えて理解すべきであることを示しているともいえます。

人の生・死と宗教

宗教に関係する者、仏教の僧侶やキリスト教の牧師の本来の役割は葬式や法事などの宗教的行事のために働くことではありません。その重要な使命は、人間一人一人が前節に述べたような問題を自分なりに理解し解決しようと努力することに対して、宗教の立場から支援し協力することです。「この世を生きる目的だけではなく、往生した後の生き様、すなわち後生での生き方についても、この世に生きる人間は真剣に考える必要があり、後生での生き方を往生する前からよく考えている人が智者であり、そうでない人は愚者である」という真言宗の教えや、「この世は生者のみの世界ではなく、生者と死者の共存する世界である」という然る僧侶の言葉は、与えられた命を真剣に考えつつ懸命に生きる多くの人達への宗教の立場からの激励の言葉であり、また、最近の人達が、生と死の根本について考える習慣を失いつつあることへの戒めの言葉と理解することもできます。

キリスト教には時間の概念が二つあります。一つはクロノスで人間が生きていくうえで必要な便宜上の時間の概念、この世を生きる人間に関わる時間の概念です。他の一つはカイロスという神が司るといわれる時間の概念です。肉体的な死を乗り越えた次の世界、すなわち、キリスト教では天国の時間はカイロスに支配されているといわれます。クロノスは人が時計で測れる時間です。すべての人に共通で、各個人に依存するものではありません。クロノスでは全く同じ時間を過ごしても、その過ごし方、たとえば、非常に楽しく過ごしたか、苦しみつつ過ごしたかによって、過ごした時間の長さについての感覚は変わってきます。通常は楽しく過ごした時間の方を短く感じる人が多いのです。このような場合は、たとえ、この世であっても、カイロスの時間の概念が関わっているとみるべきなのでしょう。それぞれを、科学的な時間の概念と宗教的な時間の概念と理解することもできます。宗教的な時間の概念はこの世を生きる人間への支援のためにある筈です。

人に与えられた有限の時間は、ある時に終わりを迎えますが、その先にある、我々には、また僧侶や牧師にすら想像もつかない次の時間がそこに待っているという希望、あるいは期待を天国にかけるのは、親しい人の死を悲しむものに対する宗教的配慮であるとしても、死は決して終わりではありません。悲しみやつらさだけで終わるのではなく、次に与えられるものがきつとあるというのは、必ずしも非科学的というわけではありません。人生を終えた人の生存中の社会的貢献はそのまま歴史として残るし、場合により、死によって一層普遍化し深化することすらあるからです。

人の死と哲学—哲学、自然科学、宗教の接点—

西洋の哲学の流れの中で死が初めて主題として取り上げられたのがプラトンの「対話編」ですが、その記述の中で一番興味深いのはソクラテスの弁明という一文です。そこでは、ソクラテスがある事情か

ら死刑を宣告された時に、裁判関係者のうち自分に無罪の投票をしてくれた人たちに対して、自分は死をどのように考えているかを説明しています。ソクラテスは「死は全く怖くない、死は自分にとって一種の幸福である。その理由の一つは、死というのは結局生きている者には理解することのできない、恐れることすらできない存在であるということである。もう一つの理由は、死は、その後で新たな世界に生まれ変わることを意味するものなので、決して恐れることではない」と言っているのです。つまり、現在の生は苦しみに満ちているので、次の生に移り変わることで、この現在の苦しい生から解放されるというわけです。この現在の生が何故苦しみに満ちているかと言うと、それは、人間は身体と魂によって成り立っていて、この現在の生を生きている以上は、身体と関わりながら生きていかざるを得ない。身体と関わっているということは生が身体の状態によって絶えず影響を受けるということで、自己の生は普遍的な真理から遠ざかってしまうことになり、その場合、身体は普遍的な真理への到達という点から見れば邪魔者になってしまう。それ故に、死によって、この身体という束縛から離れてより純粋な魂の世界に移ることが、実は人間にとって幸福なのだ」と述べているのです。「人間は身体と魂によって成り立っている」というのは自然科学の世界の話であり得ますが、「人は死によって、身体という軀(くびき)から離れてより純粋な魂の世界に移る」というのは、自然科学ではなく、人の知と生き方の根底に関わる哲学という科学の世界の話であると思います。

人間の何かをしようという意識あるいは心のはたらきはそれが起こる直前に脳によって決められるものです。脳が決めた直後に意識に上るともいえます。脳は身体の一部ですから、人が死ねば脳も作用しなくなります。したがって、現在の自然科学では、人が死ねばその人の魂も同時に消滅すると考えざるを得ないのです。現在の自然科学の世界を理解する者にとっては、たとえそれが哲学者であっても、ソクラテスの考えは否定せざるを得ません。

人間の死というのは、魂の不滅性、あるいは不死性から見れば二次的なものに過ぎないというのが古典哲学分野での基本的な考え方でした。この考え方は中世を経て近世に至るも変わることはありませんでした。中世には神の存在の問題が前面に出てきましたし、その後、近世哲学の祖といわれるデカルトによって魂の問題が主題化されて、魂の実体性をどう証明するのかという問題の解決が哲学の主題になりましたし、デカルト以降の哲学の発展の中でも魂の実体の研究は続けられてきました。

ドイツ観念論哲学の祖といわれるカントは、これまでの哲学の伝統をよく吟味し批判することで、所謂「批判哲学」を提唱しました。彼は、魂の不滅性をも批判し、これを認識論的には否定しました。すなわち、魂は死なない、身体が死んだ後も魂は存在し続けるということを命に限りのある人間は論証できないと主張して、これまでの哲学的伝統を認識論の立場から否定したのです。ただ、魂の存在そのものを否定したわけではありません。魂の存在は否定も肯定もできなかったのです。哲学が若干自然科学に歩み寄ったともいえます。さらに時が進むにつれて、哲学者、特にヘーゲルは、人の死はその存在にとって実は非常に本質的な変化であることに気付きます。人間にとって死は決して二次的なものではなくて、人の魂が真の魂に生まれ変わる機会であり、人の生の本質的な変化なのです。これは、神の子がこの世に人として生まれるというキリスト教の受肉の思想と密接に関連する発想で、哲学と宗教の関わりの重要性を示唆するものです。このようにして、人間の生にとって死が非常に本質的なものとして関わりを持つ、すなわち、人間の生を真剣に考える以上は、死を二次的なものではなく、本質的なものとして捉えねばならないという発想が19世紀後半以降哲学の分野で考えられるようになりました。

魂が一度死ぬことによって真の魂になるということ、人間は一度死なないと本当の生を生きられないと聞こえてしまいます。もちろんその後の展開は、そういった危うい方向には進みませんでした。むしろ

20世紀の哲学者たちは、生にとって死が本質的であると考えました。つまり、生にとって避けることのできない死を自覚せずにただ漫然と日々を送る生き方と、死を自覚して生きる生き方の間には決定的な違いがあるといった形で、この問題を理解し直したのです。死を自覚しないで日々の生活を生きていた人が、死を自覚して生きるようになれば、その人の生は決定的な転換を果たしたことになります。この生の転換は、自分の生をもう一度見直すことによって新たな生を生き直す、すなわち生まれ変わるといふことなのです。それは自己の身体が減んで次の生に生まれ変わるということではなくて、この世の中でもう一つの生に、もう一つの生き方に生まれ変わるといふことなのです。ここに人間の生にとっての死の、あるいは死を自覚することの重要な意味があるのだというのが20世紀の哲学の一つの到達点です。人が死ぬことによってその魂は真の魂に転換するという半ば宗教的な考え方は、20世紀の哲学者によって見直され、自然科学者をはじめ一般の人々にも理解しやすくなりました。科学的な考え方に換えられたのです。生と死に関して、哲学と自然科学の距離が一層縮まったともいえます。

死を自覚することは、死はいつ起こるとも知れず、自分では制御できず、人の力の及ばないものであることを自覚し、認識することにもなります。生の果敢なさを認識することにもなるのです。ここに述べた生の転換は、神や仏を信じない生き方から信じる生き方への転換に繋がるとも考えられます。ここに哲学と宗教との接点を見出すことができるというのは言い過ぎでしょうか。

生涯に多くの子供や夫人を含む近親者を失い、真宗大谷派に造詣深く、禅・仏教に対しても強い関心を持っていた哲学者西田幾多郎は「哲学の動機は驚きではなくして、深い人生の悲哀でなければならぬ」と述べています。悲しみから逃れたい、救われたいという思いには、神であれ、仏であれ対応してくれるというのが西田の悲痛な叫びであったのかもしれませんが。ここにも哲学と宗教の接点を見出すことが出来ます。再婚以来、西田は、われわれは一体どのように他者を理解するのだろうかと考え続けていました。

大江健三郎氏の御子息光さんが、家族と一緒に四国の祖母の家に滞在して、東京への帰り際に、滞在中よく馴染んでいた祖母に大きな声で「元気を出して、しっかり死んでください！」と言ったというのです。それに対して祖母は「はい、元気を出して、しっかり死にましょ、しかし、光さん、おなごりおいしいことですな！」と応えたというのです。東京に帰ってから光さんは妹さんとよく相談をしたうえで、電話で祖母に「誠に失礼いたしました、言い方が正しくありませんでした！ 元気を出して、しっかり生きてください！」と訂正し、祖母はこの電話を笑って受け止めてくれたそうです。その後祖母は大病をするが、幸いにも回復し、その後で妹さんに「自分が病気である間、いちばん力づけになったのは、思いがけないことに、光さんの最初の挨拶であった。元気を出して、しっかり死んでください！ その言葉を光さんの声音のままに思い出すと、ともかく勇気が出た。もしかしたらそのおかげであらためて生きることになったのかもしれない」と言われたというのです。(大江健三郎『いかに木を殺すか』より <http://d.hatena.ne.jp/Mr.Johnny/20060610>) この言葉の背景には上記の生の転換の意味が込められているように思われます。

死後の世界

生命機能という言葉があるように、身体はその機能を発揮して初めて命を持った人となります。身体の機能が生命そのものであるという考え方もできます。人の命は身体的機能と精神的機能が協同して保たれているのです。自然科学では、人が死ねば機能は消滅し、後には何も残らないと考えます。ただ、最近では生命機能に臓器移植や脳死・尊厳死の問題が複雑に絡み合うようになりました。魂は人間に身体

の他に精神的な実体として存在すると考えられるもので、本来身体を支配しなければならない存在ですが、身体機能が著しく低下してその支配が不可能になった時には魂も滅ぶと考えるのが、先にも述べたように、自然科学分野の考え方です。哲学の分野では人が死んでも魂だけは残ると考える場合があるように思われます。ここに哲学と宗教との接点があるのです。たとえ自然科学の徒でも死後の自分は何処に行くのだろうか、天国なのか地獄なのか、という考えが頭を過ることはあるでしょう。「生と死」という命題を通して哲学、宗教、そして自然科学がどこまで歩み寄れるのか、興味深い問題です。「願わくは花の下にて春死なん そのきさらぎの望月の頃」で知られる西行の、釈迦入滅の日の翌日2月16日の死が、深い宗教的意味を持つものなのか、それとも周到に科学的に用意された尊厳死なのか、静かに考えてみたいと思います。

キリスト教、特にプロテスタントでは、死ねば天国に行くことになっていて、地獄という考え方はないのです。キリスト教では、現生を生きていること自体がすでに地獄なのです。今を生きているその生き方の中で、例えば、罪を犯すとか、何か悪いこと考えて生きていること自体がすでに地獄と考えます。命を大切にしないで生きること自体が既に裁きを受けているのであって、それが地獄だということです。この世で、今を生きる中で審判があつて、既に裁きと制裁を受けているので、死ねば必ず天国に行けるのです。あの世に地獄はないという考え方です。Hell という英語は多分人間が作り出した恐れや幻想の一つでしょう。キリスト教で一番繰り返されることは、恐れるなということです。死は終わりではないので、恐れるなということです。死の先には天国があるのです。

キリスト教でも、カソリックでは死ねば必ず天国に行けるというわけではなく、神を信じず、神に背いて人生を生きるというような深い罪を犯した人でも、死ねば天国に行けるというわけではありません。キリスト教徒の全てが死後は必ず天国に行けると思っているわけではないのです。

イスラム教では死後に審判があつて天国に行くか地獄に行くかが決まります。生前に犯した罪の重さによって地獄にいる期間が決まり、その期間が過ぎれば天国に移ることが出来ます。このことはコーランに書かれています。

仏教にもこれに似た考え方があり、いわゆる輪廻転生で表現される生まれ変わりの世界は生前での生き方によって左右されると考えられています。死んだ人は初七日から七日ごとに四十九日まで閻魔大王等いろいろな大王の死者の生前の行いについての説教を受けます。その後、六道門の極楽、天人、餓鬼、畜生、阿修羅、地獄の六つの門を自分で開けてあの世に行くのです。門の扉にはその先にどのような世界があるかの表示はないので、死者の手がどの門に向かうかは大王の説教と四十九日の忌中に遺族や近親者がどれだけ死者の死を弔い供養したかによって決まるというのが仏教における一般的な考え方です。

このように死後の世界についての考え方は、宗教間にある程度の共通点はあるものの、宗教によってかなり異なる部分があります。また、同じ宗教でも宗派によって異なる場合があるのです。

戒律による制約の強さも宗教によってかなり異なります。例えば、イスラム国家で神を信じないことを公表する場合は死を覚悟せねばなりません。ただ、世界の一般的傾向としては、特定の宗教の信奉を強制されたり、宗教的戒律により現世での生活が著しく阻害されたりすることは無くなる方向に進んでいることは間違いありません。その宗教の哲学・根本原理が自分に合った宗教を選べる時代に入りつつあるとあってよいのではないのでしょうか。

では、生と死という人生最大の問題について、いろいろな宗教の間、あるいは宗派の間に、こんなにも大きな解釈の違いがあるのはなぜでしょうか。この疑問について考えるには各々の宗教が生まれた社

会の事情をみる必要があります。有史以前の時代の生活はおそらく恐怖と困難の連続で、種々の悲惨な出来事が多々あったことでしょう。そのような環境の中では、古代原始宗教がおそらくその民族あるいは部族が持つ唯一の文化、その時代の最高学問、あらゆる事象を説明する全能の科学として存在したに違いありません。具象名詞はあっても抽象理念を表すことばに乏しい言語しかもたなかった当時の人類の知恵から、自分たちを支配する絶対神という擬人体を考えたのは無理もないことだと思います。そして長い間その権威は国家権力をも包含するものでした。これが宗教の教条主義または原理主義と呼ばれているものです。

下って紀元前5世紀、紀元1世紀および7世紀にそれぞれ仏教、キリスト教、イスラム教といういわゆる世界3大古典宗教が成立します。仏教を除いて(仏教には神がありません)、神は擬人体よりもむしろ理念として認識されています。これらの宗教はいずれも成立後数世紀の間に広く世界に向かって広がって独特の文化圏を構成し、膨大な信者人口を抱えるに到りますが、この頃になると人類のものの考え方に地域性・民族性の違いが出てきます。したがってその教義も互いに大きく異なり、各々その発祥地民族の国民性を如実に反映しています。これは要するに、宗教が信者に与えているのは社会を安堵(住民が安心してその社会に暮らせるようにすること)するための指針であり、ひとが宗教に求めるものは真理ではなくて安心立命であることがわかります。近代以降、宗教のこの効用ははっきりと認識され、国家はこれを利用するために宗教を保護してきましたが、最近(少なくとも先進国では)政教分離の傾向が主流となっています。

このように諸々の宗教を冷静に比較分析してみると、どれか一つの宗教が他のものより優れているとする根拠はないように見えます。それで、たとえ他人がどれかを信じることはその人の自由であると認めても、自分はどれも信じないという人たちがいます。今から2500年前にそう考えていたのがソクラテスです。古代アテネの町は比較的自由的な町で、したがって市民は自由に考え、自由に話したのでギリシャ文化が花咲きました。そんな社会の中でソクラテスは智(ソフィア)を愛(フィリア)する学問、すなわちフィロソフィア(哲学と訳されています)を編み出し、論理的で納得できることのみが真であると主張しました。そしてアテネの町の広場に立ち、行き交う市民に話しかけて「真の知とは何か」という説法を繰り返しました。だがこれは宗教に触れる問題でこれを心よく思わない市民もいて、ソクラテスは神を信じないと訴えられ死刑を宣告されました。刑の執行の前日、悲報を聞いて集まった弟子たちにソクラテスは言いました。「私の死んだあと、私の死体は何の役にも立たないから、私の古着と一緒に捨ててくれればよい」と。記録に残っている最初の無神論です。キリストが生まれる400年前のことでした。

その後も約2000年に亘って幾多の不信心が宗教裁判にかけられ、処刑されました。かれらの正体は反逆者、盗賊、詐欺師や魔女などで、神の教えに背くものとして処罰されたのですが、それに混じってガリレイのような学者までが経典の伝承を実証的に否定した、すなわち神に背いたかどで弾圧を受けています。カトリック教会のキリスト教原理主義の時代です。

近世は違います。13世紀末葉から15世紀末にかけて起こったルネッサンス(生まれ直しの意)とはこの中世の教会支配の息苦しい空気を打ち破って、キリスト教伝来以前の寛容でおおらかなヨーロッパ文化と思想を生き返らせることでした。それまで教会が邪教の産物として排斥してきた本来のギリシャ・ローマの文化が見直され、人間が宗教の抑圧から解放されました。これが美術の世界から始まったので、日本では平面的に“文芸復興”と訳していますが、原語はもっと強く“人類の生き返り”であって再生の息吹を感じさせます。ルネッサンスはやがてカトリック教会批判となり、16世紀の初めに宗教改革が起こりプロテスタントの新教が分離独立します。

さらに 17 世紀末葉から 18 世紀にかけてイギリス・フランス・ドイツに啓蒙思想運動が起こります。これは、人間的・自然的理性を尊重して宗教的権威を排斥し、合理的な思考から立法・教育を改革すれば人間社会を改良することができるとして、広く宗教・政治・社会・教育・経済・法律の各分野に亘って旧慣を改め近代化を図りました。この思想はそのままその直後に起こったアメリカ合衆国の独立やフランス革命に受け継がれ、その前後に擡頭しはじめた科学の発達と産業革命とともに時代は近代にはいります。

先進国では近代の後半から現代にかけての期間が、宗教が本質的に進化した時期だと思います。キリスト教、特にカトリック教会はそれまでの歴史の中で王権にも勝る覇権(ヘゲモニーといいます)をほしいままにした過去を否定し、国家権力からも離れ、真に民衆と共にある組織となりました。その結果、正義や道徳や慈善の価値観を共有する異教徒や無神論者とも協力して社会に奉仕・貢献する組織となっています。同じような進化は過去に原理主義色の薄かったプロテスタント教会や仏教本山にも見られますが、発展途上国の地域、とくに伝統性の強い中東地域では残念ながら現時点においても宗教の原理主義が勢力を持っています。

それでは現在の無神論者、中世の“神に背くもの”ではなく“啓蒙思想の申し子”としての無神論者は生と死の問題をどう考えているか、一口に無神論者といっても彼らは組織をもたないので各人相互の思考の異同は大きく、絶対多数が納得する意見を描き出すことは困難です。

それでは死は消滅か、永遠の生命は存在しないのか。この問いに答えるためには別のことで考えを整理しなければなりません。——今生きている「わたくし」を考えてみましょう。「わたくし」は昨日も存在したし、10 年前にも存在していました。では、昨日の「わたくし」、10 年前の「わたくし」は今も存在するか。いや、もう存在しません。ただ、現在の「わたくし」、あるいは当時の知人・友人で今も生きている人の記憶を通じて過去の「わたくし」が存在したという厳然たる事実があるだけです。——そうです、時は無情ですべてをご破算にします。死は生体として的人格の消滅です。人は死の瞬間から、その人が生きた、生きていたということは過去の出来事となります。ただ、生前にその人の身边にいた人たちの記憶の中にはその人が生きたという記憶は残ります。この記憶が、その人が生きたという証しです。この人たちが皆亡くなった時に、この“過去の記憶としての存在の証し”は消えてしまいます。何も残らない本当の無になります。ジェームス・ボンドではないが、「ひとは2度死ぬ」のです。ただ、歴史に名を残したり、業績や作品を世に残したりした人たちは後世の人々の知識の片隅にその名を刻みこむことができるでしょう。これらの人たちは歴史とともに永遠に生きているとも言えます。

若者も生と死を語ろう

今の日本の若者は、ここまでに述べてきたような生と死についての語り合いの機会をあまり持たないのが現状のようです。学校教育、特に中学校や高校の道徳や総合的な学習の時間に生と死について語り合い学び合う授業をもう少し取り入れてもよいと思います。それは死を自覚して生きる生への転換を促す動機となるとともに、1日に約100人が自殺するという我が国の憂うべき現状の打開にも繋がるはずです。彼ら、少なくとも高校生は、生と死の問題などには関心がないのではなく、そのような機会を与えられなかったのだと思います。そのような機会に飢えていた生徒もいるかもしれません。

学校での生と死に関する授業や話し合いを通して、生と死についてのいろいろな問題を理解・認識させ、いつ訪れるか分からない死を自覚して毎日をしっかりと生きる習慣を養わせるのは大事なことです。ただ、これがそんなに困難な作業でないことは、この集まりでの市立西宮高校の生徒たちの発言を聞いて

ていてよく分かりました。曰く、「人はいつ死ぬかわからないので、自己の与えられた命をしっかりと生きることが大事なのだということを確認しました」、「人の死は単にその人一人がこの世界から消えるのではなく、その人と生前関わりがあった多くの人のその後の生活に影響を与えるとともに、その人たちの心の中に記憶として残り、そしてまたその人たちを通して後世に引き継がれていくものであると思います」という高校生の発言は、彼らにとって必要なのは生と死について語り合う意欲よりも切っ掛けであることを物語っています。「自分が社会にとって非常に有意義と考える仕事を行っている途中で亡くなった時、その仕事を完結するために現世に帰ってくる事が出来るか」という質問には宗教家のみならず殆どの人は「否」と応えざるを得ません。このような質問に対して、筆者の一人畑田は「現世の君を見ていた誰かがきっと君の代わりをしてくれるよ。君は天国で安らかに過ごしなさい」と応えることにしています。「80歳まで一生懸命生きて、疲れ果てて何もする気が無くなったらどうするべきなのか」という高校生の質問に対して、牧師さんは「何もできなくてもよいから、ひたすら祈りなさい。祈りは自分のためだけでなく、人のためにも祈るのです。祈りは宗教的な奉仕活動です。そこで何か与えられるものがきっとあると思います」と答えられました。その高校生の「その時は力が抜けていて、祈るのも面倒くさいかもしれません」というさらなる発言には、牧師は「今、高校1年生のあなたが今の考えのまま80歳になるとはとても思えないのです。私はあなたの将来について極めて楽観的です」と静かに諭されました。人間80歳になれば、15歳ぐらいの時に比べて判断の基準も変わり、見識も高まると思います。味わい深いお言葉です。

なお、西宮高校では生と死を考える授業は設けられていないが、各教員がその専門とは無関係に、授業の中で折に触れて教員自身の生き方、生と死、人間社会の精神性などについて語り、命は自分一人だけのものではなく家族、教員、友人などと深くつながるものなので、一人でも多くの人と関わって社会に貢献する力を養うよう伝えているとのことでした。このような内容の授業が全ての中学校、高等学校で行われるようになれば、大学の各研究室に1~2人の大学入学後に目標を失なった自殺予備軍がいるというような事態は避けられるのではないのでしょうか。

自殺を考える

自殺というと、うつ病が原因で自殺というようなことを思い浮かべる人が多いかもしれませんが、実際はうつ病が原因の自殺というのはあまり多くはありません。統計的に自殺が一番多いのは30~50代の男性で、女性の倍ぐらいの率です。自殺する人の考え方には一つの特徴があります。それは、困難に陥った時に、こういう状況になったのは自分自身が到らないからで、もう少し頑張らねばならないという考えの人は自殺することは無く、むしろ自分がこんなに苦しめられているのはあいつが悪いからだという風に、自分以外に原因を求める考えの人がとことん追いつめられると自殺するのです。ではどうすれば自殺を防げるのか。精神科の医者は、話は聞きますが、どうするのが良いということはあまり言いません。じっくりと話を聞いて、その人が自分なりに立ち直ってくれるのを待っているだけだそうです。自殺の社会的予防策として命の電話というのがありますが、多分、精神科医の対処を超えるものではないと思います。いずれにしても、自殺予防に対する基本的対策は、他人を責めるよりも自分を考えなおすという自制の方向に考えを向けてもらうということに、なるようです。大学での自殺の主たる原因は学業成績の不良、つまり授業についていけなくなって自殺というケースです。上記の基本的対策を適用するのであれば、本人がたとえ少しずつでも自分の学び方を見つめ直して、授業を理解するように努めさせることはできないものではないのでしょうか。教育的にはこのような考え方を小学校上級ぐらいから少し

ずつ学ばせておくのが大事なこともかもしれません。このような考え方は、いじめの問題にも適用できるのでしょうか。ご検討願えればと思います。

社会的自殺予防対策としては給料を上げるのが、一番効果が高いそうです。これを上記の大学生の自殺に適用するのであれば、よく勉強して、良い成績を挙げて、社会に出れば、良い給料がもらえて勉強をした甲斐があるよ、ということになります。社会に出るのが楽しいことだという期待と希望を持って勉強させること、そしてそういう社会を作ることが人間の使命なのだとすることを学生・若者が自覚するような教育が求められているのだと思います。

社会の人々の道徳的能力

どのような社会においても、その構成員が道徳的能力を身に付けていることは非常に重要です。道徳的能力の基本は、人間が他の人々や動植物を含む自然環境に対して、どのような態度を取るべきかを適切に判断する能力であることは間違いありません。そのような判断を下すには、人以外の動植物やものとのコミュニケーションが出来なければなりません。人以外の動植物やものは人間の言葉をしゃべらないので、それらとのコミュニケーションは想像力に頼るしかありません。また、社会人として真つ当に生きていくためには、過去に学び、未来を予測することが必要です。そのためには、既に亡くなった人やこれから生まれてくるであろう人との想像力を駆使したコミュニケーションも要求されることとなります。言葉による対話の可能な人との相互理解にも、想像力を働かさねばならないことがあります。さらに、自分以外の人や動植物を含む自然環境には、当然、自国以外の国について配慮しなければならないことも含まれています。このように考えれば、道徳的能力を発揮するための根源の力は想像力であるということになります。生きる力の根源は想像力であるともいえます。それは十分な知識と経験に裏打ちされた想像力であることは言うに及びません。だから人は真面目に生き、勉学に励まねばならないのです。（畑田耕一、林義久、澁谷亘「道徳的能力と想像力」<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/dohtoku-sohzhoh.pdf> 2009年2月5日公開）

本当の死と生者と死者の共存

人の死は、先にも述べたように、身体的機能とともに精神的機能の消失を意味する。したがって、人の亡骸は心・魂の抜けた物体であって、死んだ人の魂はこの世には存在しないというのは、科学的にも、また、宗教的にも是認される場合のある考え方です。死体を丁寧に扱うのは、そこに魂が宿っているからではなく、道徳的規範に基づく行動です。ただ、先にも述べたように、当人が消えてもその人が生きたことについての記憶は周辺の人達の中に残る。これを死んだ人の魂ということは許されてよいのではないのでしょうか。人が生きたということは、その周りの人と一緒に生きたということです。親があり、子供があり、友達あり、いろいろな人がいるわけです。その人たちの中には、当人が亡くなってもその人の記憶が残るわけです。この状態はある意味で、二次的にこの世で生きているとも言えるわけです。時系列を現在に限らず、過去、現在、未来に広げる方が、いろいろなことを考えやすくなります。そして、その知っていた人が全部なくなっはじめて本当の（二度目の）死になるのだということもできます。この考えは、この世には死者と生者が共存するという仏教の考えにも通じるものです。小さいときに母を失った高校生の「玄關に立っている人に母の幻影を見たり、もうこの世にいない母の声を聴いたりして、もう居ない人がまだ生きていると思うことがある」という発言は、彼女の心の片隅にいる母を想起させます。彼女はこの世で亡くなった母とともに生きているのです。彼女の母が本当に死ぬのは、

彼女の祖父母や母の兄弟等が亡くなり、そして彼女自身が死んだ時です。その時に、彼女は天国で愛する母と再会するのです。天国での母との再会は神の采配によるものだと思います。筆者は神を信じ神に期待します。

脳のはたらきとコンピューター

通常の意味でのコミュニケーションが取れなくなったと科学的に判断されたら、脳が機能を停止した、すなわち医学的には脳死と判断されます。このような状態で他の臓器、例えば、心臓、腎臓、角膜などが正常な機能を保持しておれば、それが実際に実現し得るかどうかは別として、臓器移植の対象になります。脳の移植は、それが現実に達成しうる条件が満たされたとしても、移植された人はもとの人格を保持できないこととなりますので、行なってはならない医療行為と考えられます。

しかしながら、脳とほぼ同じような高性能のコンピューターを作ってそれでロボットを動かして、部分的には人間と同じような仕事はするがご飯は食べないというようなロボットを作る研究が行われてはいます。学習能力を持ち処理能力も非常に大きいコンピューターが使えるようになれば、人間に近い機能を発揮するロボットは作れるかもしれません。また、ある瞬間に、人が目で見ているものを、その人の脳を通してコンピューター上に画像化することが可能になりつつあります。このような研究が進めば、ある特定の人々の経験や記憶をコンピューター上に使用できる形でデータ化して保存することが可能になるかもしれません。さすれば、その人が亡くなられても、その人の記憶・経験を他人が活用できることとなります。これをその方の人生の延長と考えるかどうかは別として、このような研究がもっと基礎的な方向に深められ、人の記憶のメカニズムが自然科学的に明らかになれば、心に残る親しかった人の記憶あるいは魂についての科学的解釈もより明瞭になってくるものと思われれます。そのうちに、御飯の要らない生命体と理解できるロボットについて、ロボットの魂とは何かを考えることが科学技術分野の課題の一つになる日が来るかもしれません。今後、コンピューターを我々の人生に、どのように、また、どの程度、関わらせていくのかを真剣に考えるべき時でしょう。

会の終わりに、「死を自覚して生きるにしても、若い時はともかく、老人になってからは、いつ死ぬかわからないと考えて心細い気持ちで生きるよりは、まだあと 10~20 年は大丈夫だと考えて、楽しく元気に働いて社会に奉仕し価値ある貢献をする方が賢明な生き方ではなかろうか」という発言があったことを述べて、稿を終えます。

おわりに

このフォーラムの一つの目標は、生と死を考えることを通して人生を如何に生きるかを考えることでしたが、生と死の本質を考えることの面白さに魅かれて、気がついた時には人生の生き方を具体的に話し合う時間は殆ど無くなっていました。なるべく早い機会に、生と死についての学校教育、悲嘆教育 (anticipatory grief education)、終末医療、緩和ケア病棟 (ホスピス、ビハラー)、尊厳死、臓器移植、体外受精、産み分け、自分と家族の将来を考える機会にもなる生命保険への加入、自殺者の増加の問題などについて話し合いたいと思っています。

全参会者のお名前を冒頭に記した著者も含めて以下に記します (順不同)。

岡本博(西宮高校教諭)、小川智弘(同教諭)、石田真英(西宮高校 1 年男子)、小倉弓枝(同 1 年女子)、別木萌果(同 1 年女子)、椎木慎太郎(同 1 年男子)、関口焜(フランス国立科学研究センター名誉研究員)、

横山順一(石橋教会牧師)、Leila Alipour (大阪大学理学研究科 留学生)、李相儒 (大阪大学薬学
研究科 留学生)、Dong Haisong (大阪大学基礎工学研究科 留学生)、畑田耕司 (はただ診療所院
長)、矢野富美子 (元大阪大学文部技官)、北山辰樹 (大阪大学教授)、嶽幸三 (渋谷高校校長)、
酒井彪覇 (渋谷高校1年)、松宮翔、細川隆弘 (高知工科大学名誉教授)、服部敬弘 (日本学術振興
会特別研究員)、関谷恭子 (大阪大学教授秘書)、松浦ひろみ、Kawamura Marcelo Kiyochi (大阪
大学特別聴講学生 ブラジル)、Arslan Omer (大阪大学特別研究学生 オランダ)、Nino Erika (大
阪大学特別研究学生 ドイツ)、北本靖子 (大阪市水道局工務部水質試験所精度管理係長)、中戸義禮
(大阪大学名誉教授)、久保田拓鑑 ((株)コンセプト代表取締役)

(豊中ロータリークラブ会員)

畑田耕一 米田 真 横田広司 田中 守 真下 節 澤木正光 丹羽権平 関谷洋子 梶田定子
木村正治 武枝敏之 松尾宗好 豊島了雄 篠原厚 北村公一